

万葉の川心

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

泉川の辺ほとりにして作れる歌

(巻第九 一七〇八番歌)

春草を 馬うま咋山やまゆ 越こえ来くなる

雁かりの使つかひは 宿やどり過りぐなり

娘が、学びたいことのために飛行機で旅立つてから三日目になる。言葉が通じない世界でどうしているだろうか。いつもは暑さばかりが増すので見ない夏空を見上げ、つながっていることを心に言い聞かせたりする。何もなければ連絡しなくていいと言ったので、便りはない。親から学ぶことはもうあまりないだろう。よく許したねと人から言われるが、おなかから生まれ出たときから、この子の人生はこの子のもので感じていた。なじみの医者からも、「転ばぬ先の杖というのは、初老の方にこそ大切。転んで骨折は寝かさざりきの始まりだから。でも、子どもには転んで学ぶ権利があるんだよ。」と言われた。危ない橋は渡らせたくはないが、時には転ぶと分かっている、自分の選んだ道を行くの見守るだけのときもある。転んだときの風景は、転んでみないと分からない。それこそ次へのチャンスになったりもする。せつかく生まれてきたから、いろいろ経験することを楽しむのがよろしいかと。が、しかし。そういうえば母は、立ち上がるときや歩くときに、壁や机をよく触るようになった。こちらは転ばれると困る。おしゃれな杖でもプレゼントしたら喜ばれるやら怒られるやら……。娘はさておき、連絡を入れてみるとしよう。「春草を馬が食うという馬咋山うまやまを通って、越えて来るらしい雁よ。その使いは何の便りも持たずに旅の宿りを過ぎていくようだ。」この歌は、泉川のほと



京都府京田辺市飯岡の咋岡神社にて

りで作られた。山が青くそびえ、目の前を清らかな川が流れていく。離れた人を思う折に、雁が飛んでいく。渡り鳥の雁は、とらわれの身の蘇武が、天子への書を託したという中国の故事から、便りを運ぶ渡り鳥とされている。一六一四番歌では、九月に来る初雁を詠んでいるが、万葉集での秋の雁は、収穫の時を告げ、鹿の音とともに秋の到来や季節の移り変わりを耳から感じさせる代表的なものとなっている。頭上を越えていく雁に語りかける、「一言でいい、便りをおくれ、元氣でいると、想っている」と。そんな景色が広がっていく。

写真の歌碑は、京都府京田辺市飯岡の神社の入り口にある。咋岡神社は木津川の氾濫により、江戸中期の元禄八年（1695）に現在地に移され整備されたが、元の位置は飯岡の北端で木津川と普賢寺川の合流点の箇所であったと記されていた。

杖は意外に喜んでくれた。家の中でこそ使うのが良いらしい。弱い握力には軽めの手提げ。白髪には、ちよいとおしゃれな帽子。回転する座椅子に、洋風のちゃぶ台。サッシのローラーを取り替えて開け閉めを軽くし、布団からベッドへ。人生はいつもこれから。ちよつとした物忘れもご愛嬌。「涼しくなったら、川を眺めに散歩に行きましょう。そろそろ初雁来るかしら。」雁がいなければ風に言おう、「拝啓、こちらは元氣です。」と。